

下田地区テングサ漁業の状況

・増加と減少

表1に今年の下田地区のテングサ水揚げ量を昨年と対比させて示しました。

表1 下田地区のテングサ水揚げ量 生kg

地先	白浜	外浦	須崎	合計
2019（令1）年	2,485	2,245	15,888	20,618
2020（令2）年	979	8,756	17,739	27,474
前年比（％）	39	390	112	133
作柄予察	やや減～並	減	増	—

現在、下田地区では3地先でテングサの採取が行われていますが、増減の状況で対照的に分かれました。白浜では前年比39%と大きく減少しましたが、外浦と須崎は逆に増加しました。特に外浦では前年比390%で4倍程と大きく増加しました。その結果、下田地区全体としては、前年の水揚げ量を上回りました。この数値は、漁協が漁業者から掛け取りした生重量ですが、他の伊豆東岸のテングサ採取地区ではどうなのか、最終的な入札を終えた生産量（乾）の統計が待たれます。

増減の理由として次のようなことが考えられます。当场が発表した漁期前作柄予察(表1)は白浜：やや減～並、外浦：減、須崎：増で、須崎では予察通りとなりましたが、白浜の極端な減少、外浦の大幅な増加は考えられませんでした。白浜の減少原因は採取努力の減少でした。現在白浜では漁業者が採取だけでなく改良・製本など出荷までの作業を行っていますが、それらの方々が新型コロナウイルス感染症を恐れ、特に改良・製本作業が密集、密閉、密接になる可能性が高いことから操業が自粛されました。掛け取り日から見た操業日数は素潜り漁業者では前年3日、今年2日、面潜漁業者では前年9日、今年1日と減少しました。しかし、面潜漁業者のCPUE（一日一隻当たり水揚げ量）は前年183kg、今年178kgと大きな差はないので、採取努力が十分であれば、このような大きな減少にはならなかったと思われます。外浦では作柄調査地点では着生量、藻長が前年より減少しており、それに基づき予察しました。しかし、作柄調査地点とは別の投石漁場にテングサ群落が形成された情報(写真1)とコロナ禍で5月に中止になった貝の操業の代わりに漁業者がテングサ採取を行ったため、増加しました。テングサを操業する漁業者(素潜り、面潜併せて)は前年の2名から5倍の10名に増え、白浜とは全く逆の採取努力の増加が起きていました。須崎では、作柄調査地点で浅所のカジメ、アラメが黒潮大蛇行に伴

う磯焼け状態になっていることが観察され(写真 2-1、2-2)、代わりにテングサが繁茂し、良好なテングサ群落が形成され着生量の増加が認められていました。その増えたテングサを採取したと考えられます。



写真 1 外浦アワビ増殖場のテングサ 写真 2-1 須崎中間漁場の状況(平成 30 年 3 月)



写真 3 白浜の雑藻刈りの状況 写真 2-2 須崎中間漁場の状況(令和 2 年 3 月)

・雑藻刈り

採取努力の減少で、テングサ水揚げでは残念なことになった白浜ですが、テングサ増殖への努力は着々に行われました。白浜ではテングサ漁場に繁茂した雑藻を駆除する雑藻刈りを 2017 年から行ってきましたが、今年も 10 月 20 日に行われました。3 名の素潜り漁業者が参加して、鎌でおよそ 2,500 m²の雑藻(オオバモク、カジメが中心)が刈られました(写真 3)。

当場の研究成果では、800 m²の雑藻刈りを行うことで、同じ場所から素潜りで年当たりテングサ約 300kg(生)が収穫されることが明らかになっています。今後も継続するとともに、操業にも意欲を持ってもらいたいと思います。

(長谷川雅俊)